

【 神の知恵を頂ける祈り 】

説教者：鄭南哲牧師

聖書の本文：第一列王記3章3-15節・暗唱聖句：箴言1章7節

<知恵の大切さ>

今日を‘高速情報の時代’だと言えるほど、今日はさまざまな情報に満ち溢れています。マスコミ、パソコン、インターネット、携帯、本などから溢れるほどの情報の洪水の時代となっています。どちらがもっと多く、もっと早く正しい情報を集め、活用するかがその人や会社の能力だと言われている時代になっています。言いかえりますと、今日は知識に満ち溢れています。確かに知識の面においては以前より今日の人々がもっとたくさん勉強したり、いろんな分野において頭がよくきれるかもしれません。しかし、その分以前の方々のような知恵に関しては以前より欠けているのではないかと思います。以前の時代に生きていた我々の叔父、叔母、あるいは親の時代の時はあんまり勉強や知識を得る機会やチャンスが多い環境ではなかったですが、今日の我々よりも知恵ある方々ではなかったでしょうか。

ですから愛するみなさん！そのような時代であってもまだ切実に私たちに必要とされることがあれば、それは知恵ではないでしょうか。知恵という単語は知識という単語と共通点はありますが、決して同じ意味ではありません。

知恵というのは知識以上のものです。‘知恵’の意味を一言で言うなら、それは与えられた情報を用いて状況などを正しく判断する能力だと言えるでしょう。人生の中、人が実際もっと生きるためもっと必要なのは知恵だと信じます。

聖書はたえずたわしたちにその知恵の大切さ、知恵ある者として、賢く人生を送ることをすすめています。

特に知恵の書と呼ばれる、箴言には知恵の大切さをよく強調しています。

箴言3:13-19『幸いなことよ。知恵を見いだす人、英知をいただく人は、14その儲(もう)けは銀の儲けにまさり、

その収穫は黄金にまさるからだ。15知恵は真珠よりも尊く、あなたの望むどんなものも、これとは比べられない。

16 その右の手には長寿があり、その左の手には富と誉れがある。17その道は楽しい道であり、その通り道はみな平安である。

18 知恵は、これを堅く握る者にはいのちの木である。これをつかんでいる者は幸いである。19主は知恵をもって地の基を定め英知をもって天を堅く立てられた。』

箴言4:6-7『知恵を捨てるな。それがあなたを守る。これを愛せ。これがあなたを保つ。知恵の初めに、知恵を得よ。

あなたのすべての財産をかけて、悟りを得よ。』

箴言16:16『知恵を得ることは、黄金を得るよりはるかにまさる。悟りを得ることは銀を得るよりも望ましい。』

そして、新約聖書の使徒の働き6章でも主に仕える働き人に要求される資格二つが出ていますが、それは‘聖霊と知恵に満ちていること’になったほど、神の人にはただ聖霊に満たされているだけではなく、知恵も持たなければならぬように教えられていました。それほど、知恵は大切なことです。

今日我々もその知恵が切に必要ではありませんか。

この人生をどう生きるべきかの知恵、危機の時をどう乗り越えられるかの知恵、人間関係の知恵、多くの選択の時の知恵、物事をよく見極める知恵、愛する者たちを守る知恵・導く知恵、残された人生をどう最善に生きることができるかについての知恵など人の一度の人生、短い人生ですが、その中には測り知れないほど多くの知恵が必要とされています。

<知恵の人ソロモン王>

今日の聖書に出ている信仰の人物の中で“一番知恵ある者、一番賢い人”だったと言うなら、当然ソロモン王だと言えると思います。彼は確かに知恵ある神の人でした。今日もパソコンのインターネットで知恵という単語を検索するとかならずソロモンという名前が言及されるほど、知恵の代名詞として言われています。

彼は箴言3000句を語り、1005曲の歌を作りました。政治・社会・動植物学・法律学・建築学に至るまで卓越した才能をもっていました。それだけではなく、彼は当時戦車1400台を製作し、12000人の騎兵(きへい)率(ひき)いた軍事戦略の面においてもすばらしい知恵をもった人物でした。

そのソロモンの知恵について人々が彼を恐れるほどの知恵を持っていたと聖書は証言しています。第一列王記3:28です。

『イスラエル人はみな、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。』 EX)たとえ話

愛する信仰の家族のみなさん！

ここでこの御言葉をとして一つ教えられる点があるでしょう。ソロモン王が持っていたその知恵というものは生まれつきのもではありません。つまり、彼が持つようになった知恵は天性的なものではなく、神様から与えられたものであることが分かります。

今日の本文はそのすばらしい神様の知恵を彼がいったいどのように頂くことができたのかよく教えて下さっています。

ソロモン王はいったいどのようにして知恵ある者になったのでしょうか。

今日の本文は彼の知恵の源泉(げんせん)は祈りという通路(つうろ)によって頂いたということがわかります。聖書はソロモン王が祈りを通して神の知恵をいただき、知恵ある者になったと教えて下さっています。多くの人たちはソロモンの富と栄華とその知恵をうらやましがっています。しかし、いざ、彼の祈りについて注目し、うらやましがる人はそんなに多くいないようです。ソロモンの知恵はまさにその祈りから与えられたことを覚えると、我々は彼の祈りに注目して見る必要があるでしょう。なぜなら、今日我々も神様から知恵を頂いたソロモンの祈りのように、それに従って我々もその原則通りに祈ればかならず、私たちも神の知恵を頂けるから

です。神様は今日私たちにも昔ソロモンに与えられた神の知恵を我々に与えようとするため、今日の御言葉の出来事を具体的に残して下さいと信じます。それではソロモン王はいったい神様にどんな祈りをささげていたのでしょうか。今日の本文では神の知恵を頂いたソロモンの祈りの特徴について三つのことを考えて見たいと思います。

まず、第一、ソロモンの王は持続的に祈られた祈りの人であることがわかります。

今日の本文ではソロモンは何か必要な時、緊急な時にだけ祈った人とは違いました。

本文の4節を見ると、“王はいけにえをささげるためにギブオンへ行った。”と書かれています。

愛するみなさん、ギブオンというところはエルサレムから西北(せいほく)向きにおよそ10km離れたところで、高原地帯丘(こうげんちたいおか)海拔高度(かいばつこうど)やく722mのところ。現代の地名はエルジブ(Eljib)というところですが、ここでソロモン時代のソロモンがささげたように見える祭壇と遺物(いぶつ)などが発掘(はくつ)されました。

というのはソロモン王がいつもここでいつも神様を礼拝し、祈りをささげたという痕跡(こんせき)であり、証拠なのです。

そして、続けて4節で彼はソロモン王は神様に一千頭(いっせんとう)の全焼のいけにえをささげたと書かれています。みなさん一千頭もいけにえとして燃やすためには相当の時間が必要だったでしょう。しかし、そこでソロモン王はそのところから離れず、つづけてこの相当の日々を礼拝し、祈りを続けたことが充分わかります。

私が、強調したいことは3節にあります。(どなたが読んでくれませんか。)

『ソロモンは主を愛し、父ダビデのおきてに歩んでいたが、ただし、彼は高きところでいけにえをささげ、香(こう)をたいていた。』

ソロモン王が“高きところでいけにえを捧げ、香をたいていた”としました。これは原語としてもうちょっと正確に翻訳すると、“ずっと、つづけて香をたきながら祈り、礼拝した。”という意味になります。ソロモン王がこれほど祈れた理由はどこにあるのでしょうか。

3節の始めに、“彼は主を愛し”たためでした。

愛するみなさん！神様に全焼のいけにえとして、一千頭の牛や羊を神様にささげたのはソロモン王がもっていた自分の財物、財産、力を神様と周りの人々に誇らしく誇示(こじ)させようとするためではありません。もしそう思っていたならば、そのものでパーティを開いたほうがもっと自己誇示ができたのではないのでしょうか。実際自分が祭司でもないのに、祭司たちに任せてもいいのに、どうして、直接こんなにエルサレムから離れていたところまで来て、こんな高いところまで上って、それとも全焼のいけにえ一千頭を全部燃やしささげるのに少なくとも一週間以上かかるのに彼はわざわざそうしたのでしょうか。

それはソロモン王がただ神様に何かを自分の求めたい、ほしがるものがあるためより、神様を愛したためであることが分かります。

Ex)愛する信仰の家族のみなさん！一度はみな恋に落ちいた時があったと思いますが、恋する人がいるときりに 会いたくなりますよね。私も結婚前、妻は宣教師で日本に、私は韓国に離れて婚約者であった妻と3年間遠距離の交際をした時がありました。その時はいかに会いたかったのか声だけでも聞きたくて、ほぼ毎日、毎晩後国際電話ですごした時がありました。それでもその時は約16年前なので、そのときの韓国での伝道者の謝礼がわずか3万円ぐらいだったのに、十分の一献金捧げてからは、ほぼ国際電話代で使われるのにもかかわらず、決してそのお金がもったいないとはまったく思いませんでした。それだけではなく、愛する人に会うために、一年間、一所懸命にお金をためて年に一度はかならず、日本に来た時がありました。どうしてですか。あまりにも愛したゆえにどんな犠牲をはらっても、何でも喜んで行動に移ることができたのではないのでしょうか。

ソロモン王も神様を愛したため、彼はひつすら続けて祈り、礼拝に専念することができたのではないのでしょうか。

ソロモン王はただ続けて祈っただけではなく、父ダビデのおきてに歩んでいました。

ソロモンの父であったダビデが息子に残したもっとも大切な遺産は何でしたか。第一歴代誌28:9を捜し、読んで見ましょうか。

『わが子ソロモンよ。いまあなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心もちをもって神に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めらば、髪はあなたにご自分を現される。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。』

どういう意味ですか。神をより深く知ろうと努力し、慕い求め、頼って祈りなさいという意味なのです。みなさんもご存知のようにダビデが書いた詩篇を読んで見ると、ほとんどの詩は神に向かう祈りでした。祈りの人ダビデに従ってソロモン王も同じく父の祈りの生活を引継いだのです。一番大事な信仰の遺産を父ダビデはソロモンに教え、残してくれたから今のソロモンになったわけであることも分かります。

悩むことがあったり、苦しむ時に祈るのはだれでもできますが、絶えず持続的に祈る人なかなか少ないのではないのでしょうか。

ソロモン王の祈りと我々の祈りのまず違った点がそこで見つけられます。ソロモンがたまたま祈っている時、あるいは何か特別に目的があって祈られたのではなく、父親の時から見て、教えられて、学ばされたように常に祈られたソロモンだったので、ソロモンは神様の御心通りに祈られたと信じます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん！

みなさんも知恵が必要としていますか。そしたら、まず、生きておられる神様に持続的に祈る敬虔な習慣を身につけるべきです。

未熟な私の経験ですが、熱心に祈っているうちに思い浮かんだアイデアとか考えなどはほとんど間違ったことはありませんでした。

しかし、自分の即興的、感情的に浮かんだ考えやアイデアなどは大体失敗やあやまちの時が多かったです。

ソロモン王の卓越した知恵、多くの人々がうらやましがってたその神の知恵はまさしく彼のように持続的に祈りを持って神様に心か

ら頼る人のみに与えられる神様の祝福ではないでしょうか。

第二に、ソロモン王の祈りは謙遜な祈りでした。

祈りというのは謙遜な人々のものです。祈りが欠けたり、持続的に祈らない理由の中一つは神様の前でまだ心からの謙遜な態度が持っていないためではないでしょうか。

自分の弱さ、自分のたりないところや限界を心からよく知っている人ならば、いつも“あ、神様、今日も助けて下さい。”と助けを求めざるを得ないと思います。私たちはクリスチャンだと言いながらも、自分の弱さと自分の愚かさをよく忘れてしまうため祈りの必要性を感じられないのではないのでしょうか。ソロモン王の祈りの中、彼の告白を聞いて見て下さい。

7節を何方か読んで下さいませんか。

『我が神、主よ。いま、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。』

ソロモン王は人々の前では王になりましたが、神の前では自分自身を“しもべ”だと告白しています。これは大事な点ではないでしょうか。教会の働き人たちも同じくいつも“神のしもべ”としての意識をもたなければなりません。国の総理も、政治家たちもみんな国民のしもべ意識をもたなければなりません。このようなしもべ意識は聖書の精神に基づいたことです。

もし、総理や大統領が国民のしもべとして働くべきであるのに支配者になろうとするとやはり国の特定の人次第に国が動かされてしまうのは当たり前です。

真実なクリスチャンであったアメリカ16代目の大統領だったアブラハムリンカーンは1863年 11月アメリカの南北戦争の激戦地（げきせんち）だったペンシルベニアの戦死者たちのための国立墓地を建設する式の時、今までの政治家たちがどれほど国民を奴隷、義生物みたいに待遇した支配者みたいなもだったのかを反省し、これからは人ではなく、唯一神様の支配のみの中で、ただ国の政治は国民のしもべとして、国民のために仕えるべき意識をもって演説をしたのが、今日我々にまでも伝えられほど、有名な演説となり、民主主義の根本になる政治意識となりました。

その内容は“この国は、これから神様の加護によって新しい自由の誕生を見るようになり、国民の(of the people)、国民による(by the people)、国民のため(for the people)の政府はこの地球上で決して滅びることはない”という内容でした。

(This nation, under God, shall have a new birth of freedom, and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.)

教会も同じです。牧会者や役員、そしてさまざまなリーダーや奉仕者たちもいつも主の教会と信徒たちに仕えられる者ではなく、仕えるために立たされていることを忘れてはいけません。それは我らの主イエスキリストが見せて下さった真の姿ではないでしょうか。

マタイの福音書20章28節です。“人の子(イエスキリスト)が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。”

しかし、愛するみなさん！仕えるのにはとても難しいことです。だから、神の知恵が必要とされます。知恵がなくてはいろんな人々に仕えることがなかなかできません。神様のしもべとして責任をはたしたかったソロモン王は自分にはそのような知恵がない自分の弱さをよく知っていました。そういうわけで彼は自分自身をしもべ程度ではなく、“自分の力では出入りするすらできない小さい子ども”だと祈りの中で告白しながら自分の弱さ、無能をよく認めています。

今日多くの神学者たちはかれが王になったのが、20代前後だったと言われていますが、そんな彼は“自分は小さい子どもで出入りすることができない者”だと告白したのはどういう意味でしょうか。

自分自身はどのように振舞えばいいのかも知らない幼い子にすぎないこと、つまり、自分はすべて正しくふるまうことができない者ですから、神様が助けてくださらなければならない者であることを正直に、切に求めつつ告白していたのです。

自分の弱さ、足りなさ、限界、自分の無知を正直に祈りをもって告白し、神様の助けと知恵を切に求めている人に神様は喜んで天の知恵をお与えて下さると信じます。当時、神みみたいな絶対な権力を持っていたソロモン王でしたが、彼は周りの人のことは気にせず、正直で、素直で、謙遜に謙っていました。神様はそのような信仰、祈りを喜んで下さいます。

ヤコブの手紙1:5『あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。』

箴言15章33節で、『謙遜は榮譽に先立つ』といわれているし、新約聖書の中第一ペテロの手紙5章5節では『神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられる。』と教えてられている御言葉を心にとめておきましょう。

しかし、みなさん、今日の多くの人たちは、自分の弱さ、限界を正直に認め、自分の愚かさを認めることを恥だと思われる傾向があります。そういうわけで、私たちは、時々知らないのに、知っているふりをしたり、やってないのにやっているふりをしたり、経験してないのにすべてを経験したことがあるような行動をとってしまう時はありませんでしたか。

有名な古代(こだい)哲学者だったソクラテスは当時知性人たちであった、いわゆるソフィストたちがまるで自分たちはすべてを知っているような、自分たちには知らないことがないような振る舞いをするのを見ながら、心を痛んで悲しみを感じながら、このような有名な言葉を残しました。“彼らは本当は何も知らないのに、自分自身が知らないという事実さえ知らない！僕が彼らと違うところが一つあるとしたら、それは僕自身は何も知らないという事実ぐらいはよく知っていることだ。だから、まず、あなた自身をよく知っておきなさい！”

愛するみなさん！私たちは神の御前でいつも他の人ではなく、自分自身をさぐらなければなりません。意外と問題は他の人たちではなく、自分が持っていたかも知れません。真の信仰の生活は神様の御前で自分自身を探り、自覚し、自分が変わるように神様に求め、自分と取り組むことではないでしょうか。

箴言12:15『愚かな者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のあるものは忠告を聞き入れる。』

箴言16:2『人は自分の行いがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。』

箴言21:2『人は自分の道はみな正しいと思う。しかし主は人の心の値うちをはかられる。』

箴言28:13『自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。』

第二コリント人への手紙13:5『あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。』

第一コリント人への手紙11:28『ですから、ひとりひとりが自分を金魅して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。』

神様は今も他の人を変えようとする前に、まず、自分自身をさぐり、自分がまず変わることを望んでおられます。

生きておられ、我々のすべての知っておられる神様の前で、いつも自分自身を深く探り、吟味し、変わり、回復されていくことが真の信仰ではありませんか。家庭内で、職場で、主の教会で、生活の場で知恵ある者としていたいのですか。

そうになりたいなら、今日生きておられる神様の御前で謙って祈りながらいつも主の助けを求めて下さい。

ソロモン王の祈りは謙遜な祈りであったゆえに神様から知恵を頂くことができました。

第三に、ソロモン王の祈りは自己中心的な祈りではなく、利他的(りたてき)な祈りでした。

本文5節です。ソロモン王の祈りの確信の部部でもあります。

『その夜、ギブオンで主は夢のうちにソロモンに現われた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようとか。願え。』

とおおせられます。

実際ソロモン王はさまざまな願いごとがあったと思いますが、彼は単純に自分の利益のための求めはしませんでした。

ここにキリスト教と他の宗教のちがひがあります。

愛するみなさん！他の宗教にも祈りがあります。そしてよく祈ります。しかし、その祈りは大体自分の欲望や願い事を求めています。しかし、キリスト教の祈りは神の国とその義のためまず求めるべきであると聖書は教えて下さっています。

マタイの福音書6章33節『神の国とその義を第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。』神の国つまり、すべての領域の上に神の統治があり、神様の御心通りに行なわれるように、そして、その義つまり、神様が喜ばれることを知り、行なえるように求めるようにイエスキリストは言われました。

今日多くのクリスチャンの方々はもっと自分自身の祈りの領域(幅)を広げる必要はありませんか。

これは決してクリスチャン人々が自分自身のために祈ってはいけないということではありません。しかし、私たちはたとえ自分自身の願い、望みのために祈るにしてもそれで終わらず、究極的に祈りが神様の御心通りにすべてが行なわれ、成し遂げられるものとして用いられなければならないことがキリスト教の真の祈りの精神であることを忘れないようにしましょう。

ソロモン王は今自分に一番必要とされている知恵を求めています。しかし、それは究極的に自分自身のためではありませんでした。神様になぜ知恵を求めていたのかが9節に出ています。

『善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければだれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。』今ソロモン王は神様から自分に与えられている任務(にんむ)と使命、つまり自分に神様から委ねられた民に正しく仕えるために知恵を求めたわけです。神様の御心になかった彼の祈りはついにこたえられ、あらゆる面において彼は卓越した知恵で民を導くことができました。

<ソロモン王の祈りにこたえてくださる神様>

今日ソロモン王の祈りに神様はどのようにこたえて下さったのかをしばらくの間、考えて見てメッセージを終わらせたいと思います。

13節を読んでみましょうか。

『そのうえ、あなたのねがわなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もないだろう。』

神様は神様に委ねられている神の民のため、知恵を求めたということは、さきほどのマタイの福音書6章33節の御言葉によりますと、ソロモンはまず、神の国と神様が喜ばれるその義を求めた御心に適った祈りではないでしょうか。

その祈りに神様は実際に御言葉の約束通りにそれに加えて、すべてのものをお与えて下さいました。

神様はソロモンに富と誉れをも与えて下さいました。それではなく、14章みると、神様はソロモンに長生きと健康をも赦して下さいました。ソロモンは求めなかった人生の必要なすべてを神様はすでにご存知で満たして下さいました。

今日私たちも、今まではただ自分の祈り課題や祝福だけのためにしか祈れなかったならば、これからは神様の御国が自分の人生、家庭だけではなく、主の教会、神の家族や周りの人々上に来ますように私たちの祈りの幅を広げませんか。ソロモンがまず、神の民を心配し、彼らのために求めたように、神の愛される家族のため、まわりの人々のためとりなしの祈る姿勢を持って歩むべきではないでしょうか。そして、今みなさんに自分の弱さや愚かさのため悩んでいますか。そうするなら、自分の足りなさをもったまま謙って主の知恵を続けて求める者に共になって行きましょう。それは決して恥ずかしいことではありません。却って神様は喜んでくださいます。願わくは、みなさんの人生の中で続けて捧げられる謙遜な祈りによって天から神様のおりに適った知恵を頂き、その神様の知恵を生かして、我々に委ねられている多くの人々のために用いられるソロモンのようなみなさん一人ひとりとなりますように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！